

Compareing coastal scenery of Hokkaido  
regarding Takeshiro's "KAIHOU-NISSHI"

# 松浦武四郎の廻浦日誌にみる 沿岸景観比較

## 1 はじめに

海に囲まれたわが国では、海岸は生活の場であるとともに、“白砂青松”に代表されるように古くから自然観照の対象でもあった。しかし、産業化が進む近代化の中で、海岸域の著しい開発や環境変化により自然が失われてきたが、北海道も例外ではなく大きな変貌を遂げてきている。江戸末期から明治維新の時代を生きた松浦武四郎は、伊勢に生まれ、青春期に日本各地を巡り、当時の世界情勢に大きな興味を抱くようになった。とりわけ北方の情勢に強い関心をよせ、都合延べ5周以上、当時の蝦夷地（北海道）を踏査し、明治維新後には国郡名の選定にもたずさわり、“北海道”の名付け親としても知られている。ここでは、北海道の海岸域の景観について、その現状を把握し、約150年前に松浦武四郎が描写した廻浦日誌の挿絵の景観と沿岸部の市町村の観光パンフレットに掲載されている現在の海岸景観写真とを比較することにより、海岸域の観光利用や景観保全を進める上での留意点を考えてみたい。

## 2 北海道の海岸線の特徴

北海道の海岸線の総延長は3,050kmであり、全国の約9%を占めている。海岸線を大まかに自然海岸（人工構造物の無い海岸）、半自然海岸、人工海岸（埋立等により人工的に造成された海岸）に分類すると、北海道の海岸線の61%が自然海岸で、全国（55%）に比べて比較的自然が残されているといえるが、それでも改変<sup>れき</sup>が大きく進んでいることがわかる。また、砂・礫<sup>れき</sup>浜は全



北海道大学大学院  
農学研究科教授

浅川昭一郎



札幌市立高等専門学校  
環境デザイン教授

吉田 恵介

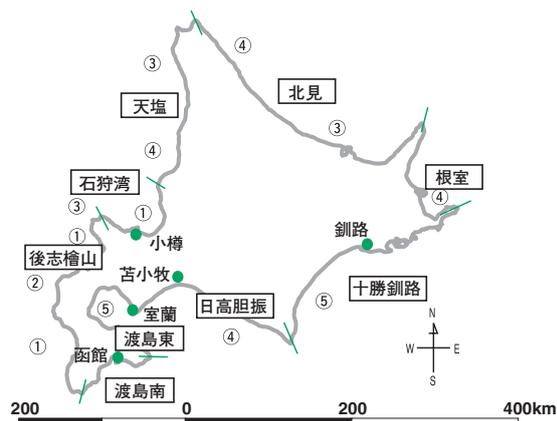


図1 北海道の海域区分と廻浦日誌の景観クラスター (①～⑤)

体の29%を占め、全国（12%）に比べて非常に多い特徴がある（補注1）。この海岸線を建設省（現国土交通省）等による海岸保全基本方針（平成12年5月策定）において区分された海域を基に、北見（総延長412km）、根室（386km）、十勝釧路（442km）、日高胆振（261km）、渡島東（257km）、渡島南（166km）後志檜山（486km）、石狩湾（192km）、天塩（415km）の9海域（図1）に区分すると、北見、根室、十勝釧路、石狩湾で自然海岸率が高く、特に北見と根室は約80%の海岸線が自然海岸であった（図2）。一方、日高胆振、渡島東、渡島南といった道南地方から太平洋岸にかけての海域では自然海岸率が低く、逆に人工海岸の割合が高くなっている。各海域の自然海岸の特徴としては、北見は砂・礫浜が大部分を占め、根室は砂・礫浜および岩礁の占める割合が高く、他の海域ではみられない泥浜が特徴的である。石狩湾や十勝釧路では海食崖が多く、天塩や日高胆振では砂・礫浜がほとんどである。渡島東は砂・礫とともに海食崖の占める割合が高く、渡島南と後志檜山では岩礁の比率がそれぞれ高い。

### 3 「廻浦日誌」の挿絵にみられる海岸景観の特徴

廻浦は「浦を廻り巡る」の意味であり、その経路は安政三年（1856年）に函館から時計回りで、日本海岸から樺太、さらにオホーツク海岸から太平洋岸という順に巡り、北海道の沿岸部を一周したものである。この蝦夷地への渡航は4度目で、およそ3周目のものであるため、蝦

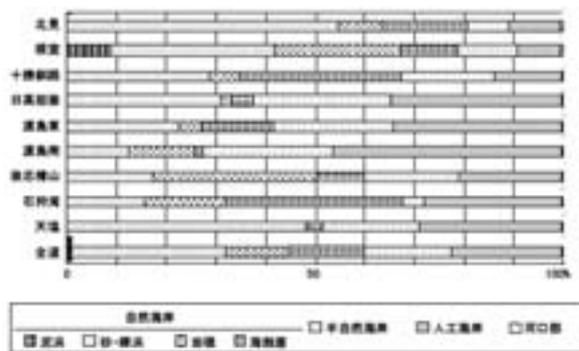


図2 海岸線の海域別比較

夷地についての概略は既に知った上での、地誌調査を目的とした踏査行であった。調査は海岸から川筋の内陸部に及び、その記録は正確であるが、それは彼がアイヌ語を話せ、人並みはずれた体力のほかその地に住むアイヌの人々と人間的なふれあいができたからであろう。

樺太を除く北海道についての挿絵は229枚で、景観描写180枚の他、河川、動植物、文物描写などである（補注2）。景観描写は、内陸部からみる海岸の景117枚、海岸部からみる海岸の景27枚、海岸部からみる内陸部（山岳）の景10枚、内陸部からみる内陸部の景（山岳）8枚、沖合いからみる内陸部（沿岸、山岳）の景18枚である。挿絵の数を海域別にみると、後志檜山が最も多く86枚、次いで石狩湾20枚となり、100キロメートル当りで比較しても後志檜山18枚、石狩10枚と他に比べて多く、これらに次ぐのは、胆振日高、北見、十勝釧路でほぼ半数となる。後志檜山や石狩湾がより詳細に記述されているのは、集落や産物など地誌として重要であることや、地形などの変化も大きいことによるものと思われる。

景観描写については、描画地点とその範囲が陸路からみる実写とは異なる挿絵もみられる。具体的には、沖合からみえる内陸部の挿絵、鳥瞰図のような形に描かれた挿絵など、通常の視点からはみられない構図のものもある。そこで、地図立体視ソフトを使い、挿絵と模擬撮影した図版との比較を行うと、写実的な描写以外に、山岳がより判別しやすいように垂直方向を強調したものや、通常の視野よりも著しく広く、中心部を描いた後にでも、左右に向きを変えた上で描き足したり、あるいは一度周囲を見てそれ

表1 挿絵の景観要素と出現比率

分類	主な要素
海洋・海岸線(35%)	磯・岩石(11%), 岬・崖(10%), 湾・港(7%), 浜(7%), 島(2%)
河川・湖沼(21%)	川・河口(14), 峡谷(3), 滝(1)
山・丘陵(16%)	山岳(12), 岬・丘(2)
建物・生活地域(16%)	稲荷・社・堂(8), 地域名など(8)
その他・不明(12%)	

らを頭の中で再構成して描いたと推定されるものがみられる。また、鳥瞰図的に描かれたものであっても、それを可能にする高さの視点場がない例もあり、あたかも高所から眺めたように頭の中で構成していると判断されるものもある。

挿絵中の景観構成要素の出現頻度を、挿絵にかかれた注釈部分をもとに分類すると、表1のように海洋・海岸線が最も多く35%を占め、主要なものは磯・岩石、岬・崖、湾・港、浜、島である。次いで河川・湖沼21%で川・河口、峡谷があげられ、山・丘陵16%、建物・生活地域16%と続いている。描写は内陸部も含むため、前述の海域に厳密に対応させるのは困難であるが、不明要素を除きおよその傾向をみると、後志檜山と石狩湾では海洋・海岸線が共に50%近くと多いが、他の海域ではそれぞれに分散している。また、個々の要素では後志檜山では磯・岩石、岬・崖、湾・港がそれぞれ多いのに対して、石狩湾や北見では岬・崖がそれぞれ半数近くか半数を超え、磯・岩石が20~30%でそれに続き、海岸の構成要素の違いがあらわれている。しかし、北見や天塩で高い比率を占めている砂・礫浜の描写は比較的少ない。構成要素の出現には相互に関連があるため、各巻別の景観構成要素出現頻度をもとにクラスター分析を行うと以下ようになる。

- ①「居住複雑」景観クラスター：見通しのきいた景観で多様で変化に富んだ地域である。また、地域名が多いことから、人が集住している拠点的な場所であったであろう(図3)。
- ②「湾・潤・港」景観クラスター：湾・潤・港、崖、浜といった海岸線に関する景観構成要素が多く、湾・潤・港では船の往来もみられたであろう(図4)。
- ③「岬・崖」景観クラスター：岬・崖や断崖絶壁が多い地域が狭角的に描かれている(図5)。
- ④「単調眺望」景観クラスター：磯・岩・石や

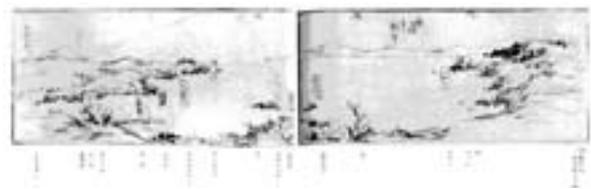


図3 「居住地複雑」景観クラスター挿絵例



図4 「湾・潤・港」景観クラスター挿絵例



図5 「岬・崖」景観クラスター挿絵例



図6 「単調眺望」景観クラスター挿絵例



図7 「居住地単調眺望」景観クラスター挿絵例

岬・崖も少なく、経路が安寧のため記述も簡素な地域である(図6)。

- ⑤「居住地単調眺望」景観クラスター：地域名が多い。岬・崖も少なく、眺望のきいた地域である(図7)。

測量を目的とした伊能忠敬の紀行文にはほとんど風景観照的記述がないといわれているが、この廻浦日誌でも、地誌調査を主目的としたためか風景観照的記載は少なく、また、書かれて

いてもごく簡単である。しかし、少ない中でも「眺望よろし」あるいは「眺望実に筆紙に及ぶべき処にあらず」といった記述がみられ、眺望景観を評価していることがわかる。また、「その風景実に目を驚かせり」「奇怪の岩石実に目も驚かすなり」「奇絶の地なり」といった記述から珍しさや自然の営為への感動がうかがわれる。さらに、「船にて見物眺望ひとかたならず」など舟からの描写があるが、動的な変化を楽しむ直接的な記述はみられない。しかし、川を舟行するにつれて鳥が驚いて飛び立つ様や兩岸の風景を「左右の山岳峨々たる赤壁にして…老樹露根、其岸壁よりは水落、石出で、風景言わんかたなし」というような動的と思われる描写もみられる。一方、伝統的風景観照としてあげられる古来の名所になぞらえた“歌枕的”観照記述はないが、「風景將軍着色物のごとし」（唐代の画家李思訓の彩色画のように美しい）との記述や「海岸峨々たる崖にして、雲林の皴法をもて画にすべく其真を得がたとぞ見ゆ」（雲林は元時代の高士で水墨で岩皴の筆法に勝っていた）など、文人としての見方も一部にあらわれている。また、「平野しばし行きて…平野小笹原、尾花、女良花、桔梗…野菊など乱れて大いに北海岸の風景より優美に見えける」と平地の草花をめぐる風景記述もみられ興味深い。

#### 4 観光パンフレットからみた北海道の海岸景観

北海道内海岸域に位置する208市町村の観光パンフレットのうち、海岸写真を掲載していたのは109市町村であった。その532枚の写真の主題に注目して分類したところ、図8のように多様な要素が観光資源としてあげられ、中でも展望・公園が多く、眺望景観が中心となることがわかる。また、奇岩・岩礁、岬・断崖といった自然景観要素や海水浴場といった利用に関連したものも比較的多くみられる。

海域毎の特徴としては、北見では多様な景観が主題とされ、特有の観光資源として流水があげられ、根室では写真の数は少ないものの、原生花園や漁業風景、流水が特徴的である。十勝釧路では原生花園、岬・断崖が、日高胆振では

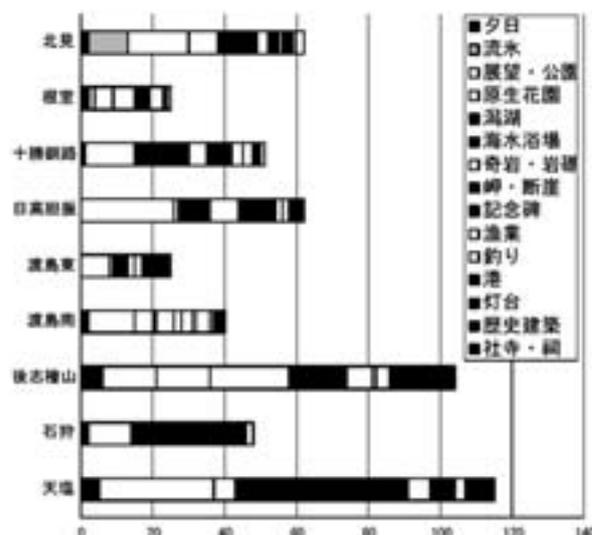


図8 観光パンフレットの主題の海域別比較

岬・岩礁、海水浴場、奇岩・岩礁の写真も比較的多く、また、渡島東は最も写真の毎数が少ないが、他の海域に比べて港が比較的多くあげられている。後志檜山は写真の枚数が多く、特に奇岩・岩礁、岬・断崖、海水浴場が目立っている。石狩湾では奇岩・岩礁が多く、鯨番屋や鯨御殿といった歴史建築が多い特徴がみられ、天塩は最も多くの写真が用いられ、主題も多様である。

#### 5 結びにかえて

##### —海岸の観光利用と景観の保全に向けて—

廻浦日誌の挿絵、観光パンフレットともに、奇岩・岩礁、岬・断崖などの景観要素が多くあげられ、自然の特異な景観への珍しさや驚きを基本とする評価は共通し、今でも主要な観光資源である。

一方、砂・礫浜は展望台や高所からのパノラマ的な眺望景観の対象としてはあげられているが、水平景としては平坦で単調なイメージを与えることにより、両者共に出現頻度は少ない。観光パンフレットでは、原生花園を除くと海水浴場としての利用以外では観光資源としてあまり評価されていないようである。

廻浦日誌の挿絵では、高い視点からの眺望景観が多く描かれていた。これは説明記録として広範囲をカバーする目的によるところもあろうが、江戸後期より名勝などで鳥瞰図的な描写が多

くなったこととも対応し、パノラマ的景観が評価され、現代につながってきていると考えることもできよう。一方、廻浦日誌では舟からの移り変わる動的景観（シーケンス）の評価は明確ではないが、海上から眺める汀から遠景の山々にいたる優れた景観の存在を示している。日常では味わえない乗船と動的景観は現在でも大きな魅力で、流水・野生動物観察などをも加えた新たな体験観光が期待されている。

廻浦日誌の全行程の景観は、居住・非居住、単調・複雑、近中景・遠景といった視点から、居住複雑景観、湾・澗・港景観、岬・崖景観、単調眺望景観、居住地単調眺望景観に分類された。海域別の特徴としては、北見や石狩湾海域では岬・崖景観が、後志檜山海域では湾・澗・港景観記述が特徴とされるのに対し、観光パンフレットでは記載が少なく、観光資源として今後さらに活用が考えられよう。

平成15年から10年をかけて整備が進められる予定の北海道長距離自然歩道（延長4,585km）では、その約45%程度は海岸近くを通るものであり、武四郎のたどった経路やそれに近いものが多く含まれているとみられる。自然景観が残されている部分では過去の追体験を可能にするばかりでなく、大きく変貌した地域でも、失われたアイヌの人たちの集落や自然を想い、歴史を感じる貴重な体験歩道となろう。整備に際し、挿絵の描写地点は展望や休息地点の設定に際して大いに参考となるものと思われる。

自然海岸の保護として、特別な価値が認められている場合には文化財保護法による名勝指定があるが、北海道ではほとんどが該当してこなかった。しかし、北海道の海岸延長の37%が自然公園（国立・国定・道立の各自然公園）に含まれ、自然海岸では45%が指定されているが、全国からみるとまだまだ低い比率である。特に、海食崖67%、岩礁56%に対して、砂・礫浜の指定は27%に過ぎず、最も規制の強い特別保護地区のほとんどは海食崖・岩礁である。このため、人工化が急激に進んでいる砂・礫浜の保全は急務である。広大な砂浜や砂丘・海浜植生などは全国的にも希少となっており、自然散策やキャンプなどの利用と組み合わせながら、これまであまり評価されてこな

かった水平景を含めて、新しい視点からの景観評価が求められよう。

平成11年の海岸法の改正により、従来の「海岸災害からの防護」に加え、「海岸環境の整備と保全」と「公衆の海岸の適正な利用」がその目的に追加され、海岸保全基本方針には自然との共生がうたわれている。

浸食や災害を受けやすい海岸線での護岸や保全施設整備では、より一層、自然性への配慮や周囲との調和が重要となり、人工的変化が大きい港湾部や沿岸道路の整備などでもランドマークとなる岬、岩礁などの自然要素の保全や調和の取れた人工物のデザインが望まれる。そのような保全や整備に際して、廻浦日誌に描かれた景観は北海道の海岸域の原風景として積極的に活用したいものである。

謝辞：本文は 北海道開発協会助成研究「江戸期と現代との景観比較による北海道沿岸部の観光開発と保全・再生に関する研究」（浅川昭一郎・吉田恵介・榊原正文・松島肇）によるものであり、研究の機会を与えて頂いたことに深謝いたします。

〈補注〉

- 1) 平成13年度海岸統計による。
- 2) 高倉新一郎解説「竹四郎廻浦日記」上下、北海道出版企画センター（昭和53年）による。なお、文中では通称の武四郎「廻浦日誌」とした。

---

## profile

---

浅川 昭一郎 あさかわ しょういちろう

北海道大学大学院農学研究科園芸緑地学講座教授。緑地計画学・景観評価などを専門として、造園学概論、公共緑地学などを講義し、学外では(社)日本造園学会元副会長・前北海道支部長、北海道都市地域学会会長などを務めている。

吉田 恵介 よしだ けいすけ

札幌市立高等専門学校環境デザイン教授。造園学・環境デザインを専門とし、造園史、造園計画などを講義している。

---